

平成26年度 第2回地域学力向上推進協議会 田村学調査官講義記録
講義「汎用的能力を育成する探究的・協同的な授業づくり」

日時：平成26年8月25日（月）10：00～11：50

場所：鶴見地区公民館大ホール

＜「汎用的能力」とは＞

- 「汎用的能力」というのは、現在の学習指導要領で求められ、これからの時代に必要な言語能力。「汎用的能力」は、実社会で活用できる能力であり、その育成のために、「探究と協同」が求められている。
- 次の学習指導要領については、総合的な学習の時間は減ることはない。中学校英語はオールイングリッシュの方向で動いている。
- 幼児教育を無償化するという話の中で5歳児の内容をどうするかとか小学校1年生をどうするかなどの議論が始まっている。今のところ最短で平成29年度の春ぐらいに次の学習指導要領が改訂される予定。
- 次の学習指導要領で最大のポイントは、本日のテーマである「汎用的能力」。いわゆる各教科等を横断する能力、実社会で活用できる能力を中心に議論していこうということになっている。例えば、コミュニケーション能力や論理的思考力、課題発見力等を優先的にして学習指導要領を考えていこうということである。
- 今までの学習指導要領は、領域固有の能力・概念、事実に知識・個別的スキルが中心となっていた。次は、「汎用的能力」が中心となるだろう。

＜先入観を捨てて、発想の転換を図る＞

- 「少女と老婆」の絵のように見方によっては、2つの異なった見方ができることがある。しかし、一度こうだと思ってしまうと、それ以外の見方ができなくなる。先入観、既成概念、固定観念に縛られてしまう。
- ありのままに見ることが難しくなっている。特に教育活動については、こういうことが多い。授業はこうだ、学校はこうだ、教育はこうだというイメージを我々がもっていることは悪くないが、あまりにも先入観が強すぎると、見方が変わっていかない。
- 自分が受けてきた教育を再現しがちである。しかし、学習指導要領が変わり、汎用的能力という見方をして変わらなければならない時期に来ているのに、いつまでも変わらないような状況では困る。
- しかし、全て変えなければならないということではなく、変わらなくてよいものもある。一方変わらなければならないものもある。発想の転換が必要である。



＜「体験の重要性」について＞

- 現行の学習指導要領の改訂を振り返ると、中心は「言葉と体験」である。
- まずは、「体験」が大切である。幼児期には特に体験が大切である。幼稚園の先生は環境を整えるのが上手である。トライアンドエラーでやっていくうちに成功する体験が大切となる。体験を通じて成長しながら学んでいく。

- 周囲の人・もの・ことなどの環境とかかわりながら、多くの事を学んでいく。
- 小学校低学年では、幼児期の学びを踏まえる。特に生活科などで活動や体験を重視して、学んでいく。
- 子どもの頃は対象と一体化できるが、大人になると客観的に分析的に見ることができるようになる。
- なぜ体験が大切かという、人によって認識の特徴があって、それが違うということである。人によって「活動中心で視覚空間型」「音声中心で聴覚言語型」「映像中心で視覚言語型」があり、それぞれ特性があり、タイプがある。我々教師は、音声中心になりがちであるが、子どもによっては活動が得意な子もいる。
- 箸を横にくわえた時と、縦にくわえた時とでは、より笑顔になる方が脳が楽しく感じる。身体がどういう状況にあるかということと脳内の活性化には、密接な関係があるということである。
- 子どもたちがニコニコしているかということはかなり大事で、授業中楽しい状況にある中で学んでいると、いろいろなことを吸収するが、真面目そうに座っていてもおもしろくないと感じれば、前頭葉が全ての情報をシャットアウトする状況にあることが分かってきた。「好きこそものの上手なれ」とはこういうことである。
- 長く映像を映した場合と短く映像を映した場合とでは、関心をもつのに有意差が生じる。長く映像を映した方が、印象に残りやすく関心を示しやすい傾向がある。
- 関われば関わるほど関心をもてる。何回も経験しなければ、繰り返し継続することが興味関心をもたせることにつながる。さらに自分から対象に対して関わるのが、関心意欲をもつことにつながることもわかってきた。
- 体験が重要だということとともに、実は体験の進め方にも意味がある。自ら動くことが活性化する。

＜「言葉」の重要性について＞

- 体験同様に、現行の学習指導要領では言語化するというのも大切であるということを進めてきた。例えば、体験したことを話し合う、体験したことを書く、要するにアウトプットするというのである。音声言語で話すことや文字言語で書くということである。
- 体験で多くのことを得るのみならず、それを言語化することにより、より確かなものにしたたり、より考えたりする。言語化することにより自覚化でき共有もできる。
- 現行の学習指導要領では、こうした言語活動を充実を求めてきた。小学校の低学年になれば、絵にししたり、図にししたり、話し合ったり、文字言語にししたりすることができるようになる。
- 社会科であれば新聞にしたりポスターにしたりして表現させることができる。1つの問題でディスカッションすることもできる。理科であれば、仮説をたてる、そして実験結果をもう一度みんなの議論の俎上に載せて考えることもできる。
- 算数の授業でも話し合いや学び合いがある。道徳や特別活動でもこうした言語活動はできるし、音楽の授業でも、このような表現をしたいという説明させることができる。図工や美術でも自分たちの作品を説明したり、鑑賞し合ったりすることができる。体育では、作戦を立てて、考えを出し合うこともできる。個人競技でも自分のやり方を他者にわかりやすく説明する、教えるということによって自分のやり方もより洗練されて、質の高いものになっていくということがある。
- 中学校でもこのようなことが行われており、生徒中心のディスカッションが行われている。こうしたことはすでに行われているはずである。

＜「習得・活用・探究」について＞

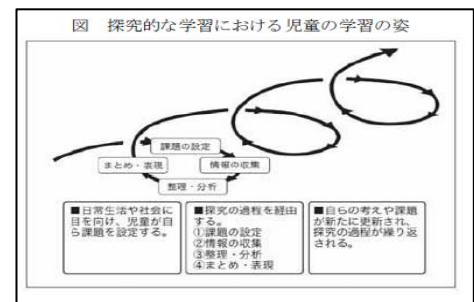
- 学習指導要領改訂の基本的な考え方は、右の7つ。その中の3つが学力の3要素である。その中でも重視しているのは、「思考力・判断力・表現力等の育成」である。これは、「汎用的能力」に関連してくる力である。
- 「習得」は、基礎的基本的な知識・技能を習得する学習活動である。繰り返し反復のイメージである。「活用」は、知識・技能を活用する学習活動である。「探究」は、課題を探究する学習活動である。
- 日本の先生は、繰り返し反復がとても上手である。楽しさのある反復、変化のある反復、自己変容のある反復となるよう工夫されている。気を付けてほしいのは、習得しているような学習活動の時にも「活用」が行われていること。「習得」と「活用」をあまり限定的に分けずに行っていくことも重要ではないか。
- 子どもたちが「3です」と答えた後に、日本の先生はそれで終わってしまう。子どもが答えた後に、「なぜそう思うんですか。」「どうしてそう考えたんですか。」という問いが日本の先生はない。「なぜ」「どうして」と問うことが大切なのである。
- 「活用」というのは、知識・技能を活用する学習活動だけではなく、課題解決する場面にもたくさんでてくる。課題を解決する場面、例えば自分で問題解決しようとするときに、調べるためにインタビューする、一生懸命資料を活用する。
- 最大のポイントは「活用」である。「活用する」ことこそが、「汎用的能力」というイメージでよいが、この「活用する力」を付けるとなぜよいかを2つ述べる。
 - ・理由の1つは、単独系知識をどんどんつなげていく、ネットワーク化していく。こうしたつながった知識のことを関連系知識というが、こうした関連系知識は使える。鎌倉幕府の誕生は、次の室町や江戸幕府の誕生につながっていくのである。関連系知識は、思考力・判断力・表現力に結び付く。
 - ・理由のもう1つは、「スワヒリ語の習熟テスト」について、学んだ直後にテストしても差が出ないが、1週間後に行った際に、40問全てアウトプットさせたグループの得点が高かった。このことから長期記憶にするためには、アウトプットすればするほど、活用すればするほど、使えば使うほど定着する。活用しないと駄目だということである。もちろんインプットも重要であるが、残すためにはアウトプットすることが重要である。

現行の学習指導要領改訂の基本的な考え方

- ・改正教育基本法等を踏まえた学習指導要領改訂
- ・「生きる力」という理念の共有
- ・基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ・思考力・判断力・表現力等の育成
- ・確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保
- ・学習意欲の向上や学習習慣の確立
- ・豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

＜探究的な授業づくり＞

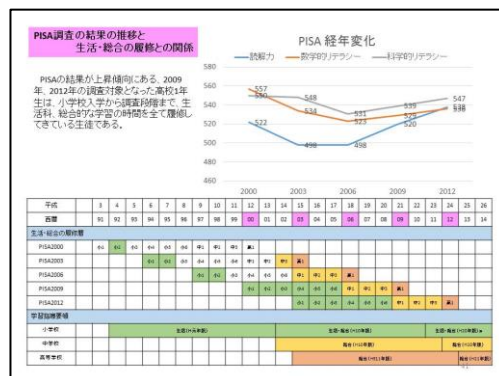
- 「探究」の中に「活用」が出てくる。「探究」というのは、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現のプロセスを経る学習であり、その中で、各教科の知識技能を繰り返し使う。こうしたことが学力につながっていくことがわかってきた。
- 総合的な学習の時間も劇的に変わってきている。特に若い先生が生き生きとよい授業を行っている。小学校のみならず中学校、高等学校でも圧倒的な授業改善が始まってきている。
- 「探究」の質を高めようとするれば、「課題の設定」と「整理・分析」であるが、あえて1つ挙げれば「整



理・分析」である。この「整理・分析」に思考ツールを用いることが有効である。

- 「探究」のプロセスが、PISA の読解や問題解決のプロセスときれいに整合性が取れているので、いろいろな結果が出始めている。全国学力・学習状況調査にも結果が出ている。総合的な学習の時間をきちんとやっている学校の学力が上がっている。
- 探究的な学習をしていると答えている子どもほど、学力の結果がいいということである。しかも A と B を比べた時に、見事に B 問題の方に結果が出ている。平成 26 年度の方がさらに差がはっきり出ている。秋田県は、B 問題の正答率が高いと同時に、文章記述の問題の無解答が圧倒的に少ない。総合的な学習の時間の「探究」が効いてきている。
- 知識のネットワークを作ることが、長期記憶や活用型の記憶になり、長きに渡ってしっかり残るとすれば、各教科の活用はもちろん、総合的な学習の時間での「探究」をかなり丁寧に行うことが重要である。
- 教科と総合的な学習の時間を分けて、教科に「探究」がないわけではないが、やはり「習得」の部分が大きく、総合的な学習の時間に「習得」がないわけではないが、やはり「探究」の部分が大きく、教科で学んだことは、総合的な学習の時間で「活用」され、確かな物になって、教科に戻って行くという関係がある。
- 教科だけでがんばるのではなく、総合的な学習の時間をちょっとがんばるだけで、年間 70 時間をちょっとがんばるだけで、かなり全体に影響することが分かってきた。どうがんばるかは、本日実践発表のあった佐伯市内の渡町台小に聞けばよいということである。

- PISA の結果と総合的な学習の時間の関係を見ると、2003 年の結果が悪かったが、その受けた子どもたちは総合的な学習の時間はほとんど行っていないということがわかる。それ以降 V 字回復しているが、それは総合的な学習の時間のおかげであると OECD がはっきり言っている。



＜協同的な授業づくり＞

- 「探究」も大切であるが、「協同」も大切である。これまでの授業は、教師のチョークアンドトークによる授業が行われてきた。教師は正解保持者であった。こうした授業はインプットが多くなり、児童生徒は受身の授業であった。こうした時に、子どもたちは「次何するんですか」「次どうするんですか」と言うようになり、自分で考えることをやめて、指示を待つようになる。
- 協同的な学習を行うことで、劇的に差がつく。しかし、教師主導の授業が全くいらぬということではなく必要でもある。そればかりだけではなく、ティーチャーだけでなくファシリテーターの力も付けていかなければならない。切り替えられるハイブリッドモデルにならなければいけない。
- 自分とは異なる他者がいることが大事で、異なる他者との対話を通じて知をクリエイティブしていく。異なる他者の存在は重要である。聞いてくれる相手がいるから一生懸命説明する。他者から異なる情報が入ってくるから自分の中で判断する。ここに「協同」構築の場が生まれる。
- よく授業を参観すると、単語しかしゃべれないクラスを見る。語れるようにしていきたい。語り手だけではなく、聴き手も育てたい。いい聴き手がいい話し手を育てる。
- 同時に、豊かな学びの場を作るためには、2つポイントがある。

- ・1つはクリティカルに聴くということが必要である。批判的に聴くということではなく、賛否を意識するということである。クリティカルな学びができる子どもたちは、授業中「だってね」「でもさ」という言葉が増えてくる。何も考えずに「よいです」というような言葉が出るようではいけない。
 - ・もう1つは、クリエイティブということである。つなぐイメージである。「ぼく、あの子と考えが似ているよ」ということ。それを大いにほめることが大切である。
- グループのディスカッションは重要である。ここに思考ツールを用いると圧倒的に積極的になる。
 - ただし、グループディスカッションは活性化しているのに、全体の話し合いになった瞬間にフリーズするクラスがある。グループの時は、教師が管理できないが、全体の話し合いになった瞬間から教師が徹底的に管理をし始める。その管理の腕が下手なのでフリーズする。
 - そこで、全体の話し合いになった時に、教師が行う板書を工夫することを提案している。
 - 集団の雰囲気非常に大事で、「探究」「協同」の場というのは、有機的かつ独自性をもつ。違いにはきちんと正対し、語り合いは一人称「わたしは」「ぼくは」という学びの場を作ることが必要。
 - 子ども主体で親和的な集団であることが非常に大切である。こうした集団は達成志向が高い。みんなでまとまって、どんだん力が付くということである。
 - 「汎用的能力」を育てるためには、プロセスの充実が大切である。そのためには、協同的な「探究」で音声言語によるインタラクション（話し合い）があり、個別的な「探究」が文字言語によるリフレクション（振り返り）が重要である。自分の学習を文字言語によって振り返ることが必要である。

＜21世紀型学力の育成について＞

- 2011年入学児童の就職先の65%は、現在ない職業に就くというキャシー・デビットソン（米）の研究結果がある。今皆さんの目の前にいる3分の2の子どもたちが今ない職業に就くことになる。
- 型の決まっていない非反復系の双方向の職業が増えていくというOECDの研究結果がある。
- 人材育成面での企業の期待と大学・大学院の取組についてのズレがある。また、学校教育に対する保護者の意識調査（朝日新聞・ベネッセ教育研究開発センター）については、65%の保護者が「受験に役立つ能力」と回答している。「こうした変化に気付いていない人たちがいるが、それは「学校の先生」である。」という学者の記述がある。
- 「21世紀型学力」を育てるには、受身で個別のバラバラな暗記再生型の授業を、「探究」「協同」の思考発信型の授業に変えていくということであり、学習者中心の学びができてきているということである。これらを固定観念にとらわれず、確実に広げていくことが大切である。
- 半年ほど前にイギリスに行った時に、その校長先生が「子どもに何を教えるかではなく、子どもが何を学ぶかである。」とおっしゃられた。まさにこれが大切である。

